

## 捨てられる外来種・外来カメに里親を捜し、 いのちの川 多摩川を守る活動

おさかなポストの会

### 多摩川 死の川からの脱却

私はいつも河原に行くと、多摩川が包括的に生きていくには、どうしたらいいのかを考えます。それは焦りに近いものがあります。多摩川流域の人たちへ、川と一緒にいかに生きていくかを提示しない限り、本当の再生にはつながりません。身近な多摩川をどう思うか、地域の友人や古老に聞きました。

多摩川を語るのには、二つのパターンがありました。「昔の多摩川はよかった」というパターン。「もう昔の多摩川には戻りたくない」というパターン。昔の多摩川はよかったと言っているのは、今70～80歳を過ぎた人たち。かつての活気を知っている人たちです。それより若い世代は、昔の多摩川には戻りたくないと言うわけです。泡とタール状の液体の流れる川。臭くてたまらない川。彼らにはその思い出しかありません。全国規模の環境を考える集まりでは「現在進行形で水が汚れ、魚がいなくなっている川」という話しばかりあります。しかし多摩川は違います「現在進行形で水はきれいになり、魚が増えている川」なのです。下水処理場を整備したおかげで、多摩川の水質は格段に良くなりました。私は生暖かい多摩川の水に浸かりながら、多摩川が死の川から脱却を果たしたと実感しています。

### 命溢れる多摩川

東京都レッドデータブックの魚類選定委員を仰せ付かっています。

都内の川をくまなく歩き絶滅危惧種を調査し、ある発見がありました。

レッドデータブックというのは、将来の状態が今より悪くなることを前提につくられています。ところが多摩川は逆で、これからドンドン良くなっていくわけで、今レッドデータブックに載ってい

る生き物は、いずれ絶滅危惧種から外される時がくるかも知れません。「十年先にはこの種は増える」というのがたくさんいそうです。

絶滅のしかたには大きく分けて二通り、①環境の悪化で絶滅したもの、②違うDNAがまじって純血種が絶滅したもの、というパターンです。ですから、多摩川には純血種のメダカはいないはずですが、それでも、メダカは確実に生息しています。色がオレンジ色だったりしますけれどたしかに生息しています。事実上のメダカが棲める環境があるなら、メダカの棲める環境を大切にしましょうということです。

メダカの棲める良い水環境は、下水処理場から始まります。時代とともに進んだ下水処理の技術や、水辺への意識改革・自然に親しむ活動や清掃活動のおかげで、最近の水質も良くなり、都市河川にも多くの魚が見られるようになりました。

### 多摩川の温暖化

水質浄化の影で、ひそかに川の温暖化が進行していました。家庭の風呂や台所から出た温度の高い排水は、下水処理場で綺麗になりますが、冷めるヒマなく川へ流されるため、多摩川の温暖化が進んでしまいました。

多摩川の温暖化を進めない知恵があります。お風呂の湯を一晩冷ましてから洗濯に使う。油のついたお皿やフライパンを新聞紙やヘラでぬぐってから洗えば、お湯の使用量が減りお湯を沸かすためのCO<sub>2</sub>削減にもなります。節水で下水排水の水温を下げることができ、水道取水が減れば山の冷たい水が余り、下流に放水されることで川全体の温度が下がります。

## 電気の川多摩川

多摩川の水は電気できています。下水処理施設は電気稼働しているからです。停電が起きれば、何日後にはウンコが処理場からあふれ、多摩川はトイレトーパーだらけの川になります。20年かけて培われてきたものが数日で「死の川」に戻り、今度死んだら立ち直れません。10年ほど前から多摩川のそんな危機を訴え続けていたのですが、2011年3月11日東日本大震災で停電が起こり緊急事態発生です。

人間の生活でいちばん必要なのは水です。停電になったって水は使います。昔の人は穴を掘ってウンコをすればよかったけれど、現代人はウンコをしたら必ず水で流さなければならない、と考えています。だから、かならずウンコは延々と川に流れてきて、そして多摩川は即死。今度の死の川は多くの人命すら巻き込み、再生をはるか遠くに追いやってしまうでしょう。

川の再生は生き物の問題、そして人を呼び戻すことだと思っています。10年ほど前から節電や節水、停電対策など、多摩川の危機管理を訴えていたことが、とうとう現実味をおびました。

## 多摩川の外来種

多摩川での頭の痛い問題は外来種です。これは多摩川の自然環境調査や保護を始めた頃から、たびたび捕まえていました。実は昭和40年代から、汚染問題の頃には、いろんな外来種がいました。グッピーなどすでにいました。子どもの頃は「多摩川でグッピーがとれるぞ！」って喜んでいました。アメリカザリガニだってそう。本当はいちゃいけないんです。面白いことに大人たちは、ブラックバスには顔をしかめるのに、アメリカザリガニやミドリガメには喜んじゃうんです。それくらい市民権を得ているのです。単なるザリガニやカメだと思っています。慣れと無知はとても怖いことです。

どこからが在来魚という定義も非常に難しいことです。いま多摩川のレッド(絶滅危惧)データ調査でも、国内間外来種をどうしようかという話があります。多摩川には西日本から来た種がいっぱいいます。それがいまでは根付いている。では、どこから在来種にするのか？それでとりあえず明治からこっちに入ってきたものを、外来種や国内間外



来種ということに決めたのです。現代に江戸時代の多摩川でなにか獲れたか、などと言う記録は残っていません。だから、何が在来種でどれが外来種か正確にはわからないのです。

しかし文献をひっくり返すと、多摩川はすごく貧相な川でした。びっくりするくらい魚の種類が少なく、数も少なかったのです。奥多摩の強烈な冷たい水が流れていて、水温が低く流れも速い。それでも、アユとウグイだけはたくさんいました。石灰岩をとおした良い水が流れているから、アユはものすごくおいしかった。そこまでの文献はありました。

## タマゾン川

「餌えなくなったからもういらぬ。他に貰い手もないが、殺してしまうのはかわいそう。なら、綺麗になった多摩川に放せば生きていける」このような身勝手な飼い主が多摩川に観賞魚を放流したため、生態系と種の多様性が崩れてきています。

私たちが対処しているのは最近問題になっている、多摩川に生息している外来種や遺棄熱帯魚です。熱帯魚ブームやバブル経済と一緒に、インテリアや癒しとして魚が売れました。ところが最近になり、魚を多摩川へ放流してしまう人がいます。目立ち始めたのは、平成に入ってからです。熱帯魚系、肉食魚大型系が特に増えました。1メートルを超えるような「そりゃ水族館でしか飼えないだろう」という魚が家庭に入り込みました。バブルのときに世界中から珍しい魚をどんどん取り寄せ、金になるからブリーダーがどんどん増やし売り出した。そのうち値段が安くなり3メートルに育つアリゲーターガーパイクや100kgに育つナマズが数百円で買えるようになりました。レッドテールキャットというナマズも100kgに育ちます。そいつが夜



中に餌を追いかけて暴れるうちに水槽を叩き割りました。そういうのが数多く多摩川に捨てられて紛れ込んでいます。

スポンモドキという東南アジアのカメがいます。最初は普通のミドリガメと同じで手のひらに乗るし、人にもなつく。でも、ずっと飼っていると1メートルになってしまふ。そうなると水槽が3メートル四方はないと飼えないわけです。それを知らずに、そのカメが日本中で何万匹も売られています。ミドリガメなんてもっと凄い。500円玉サイズが10年でA4用紙くらいに育つ、おまけに気が荒いのがいて、噛みつかれると何針か縫うようなケガをします。

きれいになった多摩川なら、私の飼っていたこの魚も、元気に大きく育ててくれることを望んで、多摩川に生き物を逃がしに来る人がいます。私はそれを無知なる善意と呼びます。大きくなりすぎた、買ったものの飼育にお金がかかりすぎる、引っ越し先では飼えないからと、多摩川に生き物を捨てに来る人がいます。私はそれを悪意に満ちた無責任な飼い主と呼びます。このような人間が遺棄外来種を増やした結果、多摩川をアマゾン川にしてみました。

多摩川に棲んでいる、全ての動物に責任はありません。日本の地に人の都合で連れてこられ、野に捨てられれば外来種だからと殺される。外来種だからと殺されて良い命など、世界中のどこにもあ

りません。決定的に悪いのは無責任な飼い主であり、そのモラルを教育してこなかった大人にあると思っています。このような生態系を乱す生物の遺棄を止められないか、という時に出来たのが「おさかなポスト」だったのです。

## おさかなポストの始まり

多摩川のほとり、稲田堤のコンクリートで固められた水辺、そこをビニール袋に金魚一匹入れ、泣きながら歩く子どもがいました。「どうしたの？」と声をかけたら、「お母さんに捨てて来いと言われたんだ。でもボクはかわいがってる金魚だから、捨てたくないんだ。でもウチに持って帰ったら、お母さんはトイレに流すって」「困ったなあ。金魚を多摩川に放しても、すぐに他の生き物の餌になって死んじゃう。多摩川に金魚を逃がすと元々棲んでいる魚たちが困ってしまうし、悪い影響を与えるよ。おじさんが魚を飼っている池があるから、金魚をあずかってあげる。時々餌をやりになれば、いつでも会えるよ。」

やれやれ一安心と胸をなで下ろしましたが、1週間後には「なんか・・・いつのまにか数が増えている！」池をのぞいてびっくりしました。この情報を知った子どもたちが池の中に金魚を捨てに来た、勝手にね。で、よく見ると変なのも入ってる。それは金魚を食べる熱帯魚でした。「魚を無差別に池に入れられたんじゃ、ちょっと困るな」そこで専用に熱帯魚を入れても良い、網生け簀を一個作りました。「おさかなポスト」は始まりました。



## おさかなポスト

「おさかなポスト」は色々な事情で、どうしても飼えなくなってしまった熱帯魚などを、多摩川に放流しないように、入れてもらうイケスです。いわゆる、赤ちゃんポストのお魚版です。「おさかなポスト」は全て私費で運営され、行政の支援など無くボランティアで活動しています。



新聞やテレビなどで度々取り上げられた効果もあり、年間1万匹前後の観賞魚が入れています。グッピーやネオンテトラなどの小型熱帯魚から2m以上に成長するアリゲーターガーパイク、高級熱帯魚のノーザンパラムンディーなどの魚や、アカミミガメやゾウガメの仲間もおさかなポストで預かりました。

しかし、スズキ釣りに行って1mを越えるアロワナを釣り上げたり、めだか取りに行った親子が、グッピーを取って帰ってきたりする、そんな情報が今も後を絶えません。

## 里親探し

預かった魚は、病気や怪我をしているものが多いので、治療して里親を捜します。「おさかなポストの会」をつくり、一緒になって会を運営してくれるような仲間を増やし、会の規則で魚の里親には終生飼育を宣言してもらいます。魚を無差別に渡すと、再び手に余ると捨ててしまい、同じことの繰り返しになるからです。

観賞魚を勝手に持ち出して川へ捨てることのないだろうと、学校や公共施設に捨てられた魚を育ててくれる里親学校を募りました。学校なら水槽がどこにでも必ず一つはあるし、子ども達が飼育委員になって育ててくれると思ったからです。今で



は、保育園、幼稚園、小・中・高・大学校、高齢者施設、障害者施設、児童養護施設などが里親になってくれました。

学校では子ども達が、身近に命を感じ、自分たちに何ができるのかを考え、みんなで魚を育てることで、命を無駄にしないようになります。これらの活動は保護者や先生方から、環境教育と情操教育の両面で高い評価を得ています。

東日本大震災の津波で、カメや魚を失った方たちに、「おさかなポスト」のカメや魚の里親になってもらっています。

## 東日本大震災とおさかなポスト

3月11日の東日本大震災当日から「おさかなポスト」に熱帯魚やカメが大量に持ち込まれました。魚を持ってきた人に聞くと「地震で水槽が割れたり倒れたりして飼えなくなった」「地震で水槽が溢れ床を濡らし階下まで迷惑をかけた」「池の底が割れて水漏れを起こした」などが理由でした。数日後から計画停電が始まると、電気ヒーターが作動しなくなるため、水温の低下や酸素不足、濾過器の停止などから飼育困難となり、さらにおさかなポストへ持ち込まれる数が増えました。しかし、それらは津波や家屋の倒壊などとは無縁の、東京・千葉・埼玉・神奈川からの被災魚でした。後から聞きましたが、悲しいことに東北の被災地では、ほとんどの熱帯魚は震災当日の停電で死に絶えたそうです。

4月に入り東北方面の復興と共に、おさかなポストに持ち込まれる地域が変わりました。宮城県や福島県の地震被災地から、宅配便でニシキゴイや金魚が届きます。被災地での復興と共に、割れた池のニシキゴイやカメが飼えない事態が判明しました。

## 水辺の安全と自然環境の考え方

水辺の自然と触れ合うことの楽しさを伝えるために、全国の河川や水辺・幼稚園・保育園・小学校・中学校に出向き、水辺の安全教育や移動水族館とふれあいタッチプールで子供たちや保護者に向けて指導しています。その中でも、出張紙芝居は大人気です。小中学校での総合学習や課外授業、幼稚園の子供も、紙芝居形式なので理解することができます。

水辺での活動は安全の確保を第一に考え、ライフジャケットの着用を義務付けています。ライフジャケット着用での飛び込み、ゴムボートレース、川流れ、水中鬼ごっこなど、様々な川遊びを体験させます。ライフジャケットは自費で300着以上を購入し、他の団体にも貸し出しています。「自分たちで安全な楽しい水辺を作ろう」と、定期的な河川清掃美化活動を実施し、水辺を綺麗にする喜びを持たせます。集めたゴミは参加者が家に持ち帰り、分別して処理します。よく見かける「後で収集車が来るから集めて置いて帰る」と言うような無責任なゴミ拾いにしません。

生物観察では自分で魚を捕り、魚を種類別に水槽に入れて、参加者が水族館を作ります。自分で魚を調べることにより、1人1匹は魚の名前を覚え生き物の棲む環境を学べます。

小学校のプールなどを利用した、着衣遊泳ライフジャケット体験をしています。何があっても浮いていられる安心感を身体で感じ、ライフジャケットを着用することにより、事故を防げることを伝えます。水辺は楽しいだけでなく危険もいっぱい。学校でも「川は危ないから近づいてはいけない」と言われています。

ライフジャケットを着て川に行くを基本に

「一人で川に行かない」

「濁った川に近づかない」

「困ったときは大人を呼ぶ」

「水に落ちてもあわてない」

「生き物に優しくする」

を掲げて、子供たちに伝えながら活動しています。

おさかなポストの会 代表 山崎 充哲